『先生』考、そして「思秋期」後の妻たち

高川みち子

佐藤博樹先生

心に残るお話をありがたく伺わせていただきました。

私は、冒頭、佐藤先生が「慶応大学卒業の人はいますか、先生というと誰ですか？」とおっしゃった時に手を挙げたものです。

福澤諭吉は、Education という言葉の日本語訳が「教育」となってしまったことを大変残念がっていた人でした。著作『文明教育論』に、「学校は人にものを教うるところにあらず、ただその天資の発達を妨げずしてよくこれを発育するための具なり。『教育』の文字は甚だ穏当ならず」とあります。
創始者のその心をくむ意味合いもあって、教授どうしは「君」、学生は教授を「さん」と呼び、『先生』という時にはそれは福澤諭吉を指す、という伝統があります。

私は学年でいうと佐藤先生のひとつ上なのですが、当時、東大紛争を厭って比較的穏やかであった慶大に移ってこられた先生方がいらっしゃいました。
そのうちのお一人が、伝統の「君」と「さん」にどうしても違和感を拭えず、「みんな、どうかしている」という言葉を残して去っていかれました。むつかしいものですね。

友人が、二度目の結婚で６６歳でパパになりました。昔、『愛さえあれば年の差なんて』という歌がありましたが、まさにそれを地で行く二人、時間的にも経済的にも余裕のある彼は理想的なイクメンで、ゆったりと子育てを楽しんでいる幸せなカップルです。

先日、彼と話をする機会があったのですが：若い頃の自分が家庭人としてどうだったかを思い出話として奥さんに話していたら、黙って聞いていた奥さんが突然、「今から前の奥さんのところに謝りに行ってください」と言ったのだそうです。そして、「私も一緒に行って謝ってってあげるから。二人でいきましょう」と言われて、「いや、もうオレ参っちゃってさぁ～」というので私は笑い転げるしかありませんでした。

彼の前の奥さんとは子育て仲間でしたが、彼が格別、家庭より仕事という人だったとは思いません。日本の家庭の平均像よりは　今や死語かもしれませんが「マイホームパパ」の方に近かったようにも思います。

それでも、欧米人の友人たちにありのままの日本の家庭生活について話すと、「どうしてあなたたち日本の女性は夫の会社を訴えないのか?!」と言われるから、めんどくさいわね〜、と前の奥さんと話し合った記憶はあります。ちょうど、斎藤茂男氏が「妻たちの思秋期」を書かれた、８０年代はじめのことでした。

彼の友人のひとりは、お互い離婚は考えていないし、ケンカしているわけでもないけれど現在妻と別居中で、その奥さんは「若い頃私が本当に苦労していた時に何の力にもなってくれなかったあなたとは大事な余生を一緒に過ごしたくない」と言ったそうです。
エリート商社マンの妻として外地でたくましく家族を支えていた美しく聡明な奥さんの内助の功を、夫はいつも人前で褒め、惚気けてもいたのですが、７０歳を前にして突きつけられた突然の宣告に、「あいつ、すっかり老け込んじゃってさあ」だそうです。コワイ話ではあります。

私たちは、夫は撃ちてし止まんの企業戦士、専業主婦の妻は健気に銃後を守る、というスタイルの最後の世代なのかもしれません。
姪・甥たちになると、大黒柱妻もいれば、専業主夫もいて、しなやかに上手に個性ある家庭生活を営んでいます。姪の一人の夫は、遠方に住む父親の最期を仕事のため十分に看取れなかった後悔から、母親が倒れた時に介護休暇をとりました。
建前としては、「権利を行使するにあたって何の問題もない」ということになってはいますが、「介護休暇を取る・イコール・今後の出世は諦める」というのがジョーシキなのだそうです。姪夫婦はとことん話し合い、介護休暇をとると夫の将来の収入増が期待できなくなるので、姪が夫の手助けを受けつつフルタイムの仕事をして子供たちの教育費を蓄える道を選びました。そしてジョーシキ通り、夫は出世コースからはずれました。これが日本の現実です。

ただ、選べるということは良い事、とつくづく思います。
「こういうものだ」「こうでしかない」と思わされ、自らも思い、後の世代の人達にその不甲斐なさを責められれば「だってあなた、私たちの時代のお姑さんの怖さったらなかったんだから！」と、到底通じない説明をするしかない自分が口惜しいです。

女性の自己実現としての社会進出を支える気運がホンモノであると思えることが嬉しく、「後から来るあなたたち、うまくやりなさい！男性も女性も、幸せな職業生活と家庭生活と、そして幸せな老後を自分たちのものに」…と心から願うものです。